

宮城・一本柳遺跡 いっぽんやなぎ

- 1 所在地 宮城県遠田郡小牛田町字新一本柳・一本柳・塩釜
- 2 調査期間 一九九八年(平10)六月―十二月

- 3 発掘機関 宮城県教育委員会
- 4 調査担当者 伊藤 裕・菅原弘樹・岩見和泰
- 5 遺跡の種類 集落跡・屋敷跡
- 6 遺跡の年代 奈良・平安時代、中世、近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一本柳遺跡は、県北中央部の大崎低地東縁部に位置し、鳴瀬川左岸に形成された標高約一〇mの自然堤防上に立地する。奈良・平安



時代、中世、近世の複合遺跡で、東西五〇〇m以上南北二〇〇m程の広がりをもつ。
 調査は鳴瀬川中流域堰関連工事に伴うもので、一九九五年度以降継続して行なっており、今年度までに約一七〇〇〇m²の事前調査を

実施した。

調査の結果、中世では、道路・溝、堀によって区画された一辺七〇〜一〇〇mほどの方形の屋敷が、川沿いのほぼ同じ場所に重複していくつも営まれていることが明らかになった。屋敷地内からは、掘立柱建物や井戸約二七〇基をはじめとする多数の遺構が発見されており、少なくとも鎌倉時代後期から戦国時代頃まで存続していたことがわかってきた。

今回報告する木簡は、遺跡のほぼ中央部で、東西約一〇〇m南北二〇m以上の屋敷を囲む溝(SD五八九)から出土した。溝の規模は上幅三〜四m深さ一・五m程で、年代は二三世紀中葉〜一四世紀中葉頃と推測される。

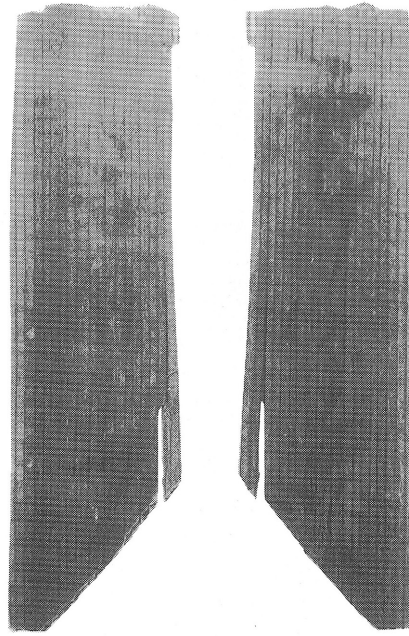
共伴する遺物には、かわらけ・国産陶器(常滑・渥美・古瀬戸)・中国陶磁器(青磁・白磁・青白磁・黄釉・鉄釉)・漆器・石鍋・茶臼などがある。とりわけ青白磁梅瓶・白磁四耳壺・黄釉盤といった希少な中国陶磁器や茶道具(鉄釉茶入れ・茶臼)の存在は、屋敷居住者の階層の高さを示唆している。

8 木簡の积文・内容

- (1)

・	□	□	□	□
□	□	□	□	□

(102)×28×4 019



下半は切断されている。「二斗」という語句と、上端から1cm程下に紐をかけた痕跡があることから、荷札かと思われる。

(1~7 菅原弘樹、8 吉野 武)